

崩え出づるもの

特277

631

特277-631



*76W10570 *

588

崩え出でんとする人々のむねに



始



崩え出づるもの



熊野宗純著





76W10570



序に代へて

萌え出づるもの——

それはゆめ偶然ではない、止むに止まれぬ内なるものあらはれである。

地涌の生命のあふれである。

あの微かなる名もなき野の一本の草花を見よ。静に思ひをひそめてみいる時、
なんといふ大自然のいみじき生命の尊さよと拜ますにはあらはれない。麥の芽、
草の香、ことごとくこれみめぐみのあらはれであり、みひかりである。

遙かなる空を仰げ。ふりそそぐ陽の光り、映へゆく雲、その光輪の中に聞ゆる
さやかなる鳥の聲、なんといふ妙なる生命の律動であらう。

悉くこれみめぐみの啓示であり、みひかりであり、みこゑである。

ものみなはこのみめぐみにはぐくまれつつ生きてゐる。ひと時もこのみめぐみを離れては生きられぬ、跪かずにはゐられない。

照る日も曇り荒るる日も、なべてこれ、その時その時のおはからひである。おはからひそのままがみめぐみに生くる日の限りのみむね。

人の世の悲しみも歡びもことごとくこれおはからひであり、みむねである。

偉おほいなるかなこのみめぐみ。

思ひははるかに八年の昔にかえる。恰もわれ死生の間を彷徨ふ日の幾日となき病床にある時、たえまなく各地の同信の諸見姉よりの涙なしにはうけられぬ、限りなきみなさけをそがれ、今にして思ふだにただに胸せまる思ひ出のみ。

そうした感激の日の心に灯ともし出されたのが、今の小冊「めぐみ」である。ささやかなるこの「めぐみ」もなべての尊いはぐくみに生かされて、今ははてなき

お育てにあづかつてゐる。そうしためぐみのまにまにまた絶え間なく佛への巡禮の旅をつづけさして頂いてゐるのが今の自分である。そうした旅の先々にていつもよく、芽生へんとする人々の心の糧にふさはしきものがなとたえずきかされてゐた。さはれ暇なき旅の日のみつづく身の何時の日にかはそれを果さんものがなとつね／＼心のみかけてきた。

たまたま不思議なる宿縁にもよほされて、眞木一志氏の無我的奉仕により、このたび「あふひ叢書」の編まるるの日はつひに今めぐまれた。思へば思ふほどただごとならぬおはからいに、敬虔の合掌を献ぐるとともに、眞木氏の献身的の努力に對して衷心から感謝せずにはゐられない。

今にして顧みれば、わが佛國土への巡禮の途上のさもしさもあれど、その時その時の堪へられぬ心の閃きであり、その聲のままをかきつらねおきしこの

“めぐみ”の片々

せめてこの心の閃きを、呼びかけを、今しも萌え出でんとする人々の胸に捧げ互に求め互に語り互に勵まし、佛の聖國へ、一步一步と確かな足取を運びゆかんの念ひこそせめてもの希ひ。

よしその聲のかなしくとも、よしこの閃きのあまりにほのかなるものにて、そこから 偉いなるめぐみの涌きいでんよすがにもと思念する心を汲ませたまへ。悲しみも切なさも、はたよろこびもともにやがての、偉いなるめぐみによみがえらせんのおはからひであり、みち火であるとみ名となへたまへよかし。さらばやがて

みめぐみはただ、あなたのためにそそがれてゐることに氣附かるであらう。みひかりはただ、あなたのためにかがやいてゐることに氣附かるであらう。

見はるかす天地の極みなきみめぐみに生きらるる日のあなたを、ひたすらに念じつつこの“萌え出づるもの”を先づ捧ぐる。

昭和十四年天長の佳節を迎えんとして周慶山の山ふところの泗水庵にて

合掌 宗 純

目次

聖職の神々に捧ぐ……………一
みいくさ
 ものみなを越えて……………一四
 おん身達よ……………一六
 この悲願にこそ……………一八
 ただごとならじ……………二〇
 躰きしもの 其の前に立つもの……………二三
 なりきれ……………二五
 涌きいづるもの……………二七
 靈魂の秋……………二八

この逆縁にして……………一九
 病める若き婦人に返して……………三〇
 拜むこゝろ……………三三
 裏なるものゝその尊さ……………三六
 一莖の菜つ葉……………三七
 生き伸びる……………三八
 勝つもの 敗くるもの……………三九
 よみがへる一茶……………四〇
 今 現に生きてゐるといふこと……………四一
 眞の強い人……………四四
 良寛さま……………四六

初めて道を求めんとする人々に……………五
 我を棄てよ……………六
 お百姓……………七
 今まのあたり母おはします……………七
 裏に燃ゆるもの……………九
 生れかはつてこそ……………九
 業にさいなまれつゝ……………七
 ものみなよし……………一〇
 たゞこの現実の一步から……………一六
 蓮月尼にひかれて……………一八
 涙にぬるるもの……………二二

變物といはれても……………三三
 見えざるもの……………三五
 献ぐる愛……………三七
 裏を見せ表を見せて散るもみぢ……………三二
 おし拓け　そこに生命あり……………三四
 創造せんとする願求……………三六
 伸びゆく信仰……………四〇
 不退轉の行者たれ……………四四
 心魂を打ち込め……………四六

聖戦の神々に捧ぐ

ほの暗き　灯のもとに顔よせて
 生き残りたる　名をし呼びあふ
 なんとといふ嚴肅な歌だらう。生命そのものゝひびきだらう。
 こうした嚴肅そのものゝ魂の聲にふるゝとき、どうしてじつとしてゐられやう
 この歌を口ずさむ時、まさしくと前線勇士の眞に迫りくるものにおののく。
 この御苦勞。

この命を的の聖戦の勇士の方々
 唯々合掌せずにはゐられない。これ全く　上御一人の御稜威とともに、その
 大御心にそひたてまつるわが勇士の

大君の邊にこそ死なめ

の、ひたぶるのまごゝろからの閃きである。

陛下とともに生きた勇士の姿である。

大御心にこそ 生き甲斐も 死に甲斐もとの莊嚴なる魂の姿である。

あゝ、なんとといふ尊嚴なる魂の世界だらう。

上御一人あつてこそ生く

わが大日本の臣民の道であり、いのちである。

犠牲的精神——それは大忠の前にはあり得ない言葉、

犠牲をのり越えた大信念、

大御心に生きてこそ生きとし生き得る。

大忠は忠を忘れて忠を行ひ 大孝は孝を忘れて孝を行ふ

まこと犠牲の言葉は、わが日本の忠と孝との前には用のない言葉。

わが日本のこの國は 陛下なくては生きられぬ國、生きられぬのが臣民の道である。陛下はわれら臣民の一人一人の尊い生命である。

どうしてこんなに御奉公申されぬ自分かと、そのあさましさに泣くものこそ、眞に御奉公に、念々懺悔し、念々勿體ないのまことを捧げつくしてゐるものではあるまいか。

産みの親でもそうである。孝行の足らぬ至らぬ勿體ないと泣いてゐる者こそ、これがしんからの孝行者ではあるまいか。

義は君臣 情は父子

との、このふりそぐ 大御心はどここの國に行つてか聞きうるみことば。
泣きぬれてたゞ跪く。

子らはみな、いくさの庭に出てはて、

おきなや、ひとり、山田もるらん

大御心は、山田の奥のその奥の賤が伏屋の遺家族の老父母のあけくれの姿にも
そゝがせ給ふ。

この大御心——このみめぐみの親心にひれふして泣く

聖恩の渥きに感泣せずにはゐられない。

この日本

この臣民

まさしくこれ親心の一つに生きた、生きずにおられぬ大日本。

さはれ

杖、柱とたのむ一人子が

臨終のいとし子にも、親御にさへ、涙ふるつて勇ましく出て征つて下さった方
方、みんなこれ、聖恩に感泣して、ふるひたつて征つて下さった方々のみ

みんなこれ、そのまゝわれら一人一人のための御苦勞

思ふだに胸迫る。

さればこそ

聖戦に征きます、斃れたまふ、傷きたまふ方々は、これまさしく、かみわ神業に参じ
下さった、神様である。

敢て

神様と申さずにはゐられない。

神様と呼ばずにはゐられない。

散つては護國の神となり給ふ方々。はや鎮守の森に萬歳を叫んで征かるゝ總ての、みいくさ人らは、まこと神様の心でこそ征つて下さる。

誰ならば命を的に、誰ならば一家を捨て、

これ全く、大御心にひたぶるのまことそのまゝの征衣上途の神々である。

同時にその遺家族はまさしくこの護國の神を産ませ給ふた神々のお家である。

どうして拜まずにゐられやう。

その、人ならぬ神業かみわざに参じ下さつた方々を、敢て 神様と呼ばずにはゐられな

いのが至心である。

その方々のうち、

わけて散つて護國の神となつて下さつたその神靈

どうして合掌感泣せずあはれなみにゐられやう。

あの草むらに、わたづみに、最後の息の絶ゆるまで

天皇陛下萬歳

と、これこそ永遠の大生命への歸命であり、往生人のよび聲である。み名であるかぎりないのち、かぎりないみひかりの姿。

なんとといふ莊嚴さ

さはれまた

白衣の勇士として歸還し給ふ

なんとといふいたくしいみ名だらう。

なんとといふいとほしい呼び聲だらう。

お呼びするさへ勿體ないおん姿。

聖戦の神のみ心そのまゝに征つて下さつた方々のこのお姿。

軍病院のたそがれの窓に、梅の香も散つたその庭に、途すがらにしても、あの尊いお姿を見かける時、

どうしてひそかにも拜まずにはゐられやう。

これまたひとしく、大御心に——われら一人一人になり代つて征つて下さつてのこのお姿。

勝たずば生きてかえらじと

誓ふ心の勇ましや

とは、今にも耳にいたくひびき残つて消えぬ、出征の日の勇士の方々のめいめいが、車窓に高く叫び歌つてわれらにこたへて下さつた命がけの叫びであつたその方々が、この白衣に包まれて歸還し給ふ。しかも再び前戦への日のみ念じてやむにやまれぬ志念といふ。

傳へ聞くだに頭が下がる。掌が合はさる。

全国の津々浦々にこだまする、うちふるふ聖なる感激のそのままの有様がまざまざと思ひ浮ぶ。

この聖戦に

散つて護國の神となつて下さつた方々は云はずもがな

白衣の勇士

出征の勇士

なべてこれ

神業かみわざに参じ下さつた 神々である。

生き残りの神々である。

どうして拜まずにゐられやう。

田園のおちこち

山ふところから そのすそに

煙の街に

海のほとりに

なんと多くのあの日の丸の 海軍旗の立てられてゐることだらう。

あのみ旗のひるがへるところ

あのみ旗の立つ家々は

すべて、われらの一人一人になり代つて出征して下さつた、護國の神の産みの家。

汽車の窓から——途すがら

ただ ひれふす念ひにおがみゆく。

幾万の護國の神、

幾万の白衣の勇士、

幾万の、今、現に、みいさに生き残つた名を呼びあつては、弾丸をくぐつて、

露營の夢もまどかならぬ勇士、

その御遺族を數ふるとき

大御心の切なさに

このみいくさのいのちとなつてくださったとは申せ

ただ、ただ、このわれらの身代りに

命をまことに

一本柱も、一家を捨てて

お働き下さるその御苦勞、

思ひめぐらせば身の毛いよだつ懺悔と合掌の外はない。

勿體ない

申しわけない

じつとしてはゐられない

今更に

大御心にひれふしつつ

みいくさに参じ下さつた方々と、その御遺族に

跪きつつ、み名となふ

みいくさは、今、たけなは

われらもやがて、召さるるも、召されぬも、老いも、若いも、男も、おんなも

なべてこのみいくさの楯とならまし

その心、この念ひ

この魂こそ

久遠のおぼみおやによびさまされた

みむねに生れ生きてこそ

ひとしほの感激と

いよよ切なる合掌の

至心に祈り

大御心に

みいくさ人の、その人ならぬ神々に

こたえまつるの道である。

ものみなを越えて

むかし、むかし、久遠の昔、一人の菩薩があつた。

その名は常不輕菩薩といつた。

この菩薩——その名の示すやうに、なべての人を輕侮することなく、不斷合掌して伏し拜むのであつた。

そうしていつた。

私は心から御身たちを敬ひます。

御身たちはやがて皆、佛になり給ふ尊きかたがたです。

と、しかるに、心よからぬ人達は

この無智の比丘いづこより來る。

と、罵りつゝ、はては怒にまかせ杖や石もてこの菩薩をぶつものさへあつた。

しかし彼はつゝの暈ることなく避けまはつて、

御身達はやがて皆、佛になり給ふ尊きかたがた。

と、同じ言葉を繰り返しかえすのみであつた。

げにこの菩薩こそ、

釋迦牟尼世尊の前身であつた。

あゝ

合掌

この合掌

ものみなを越えておろがむ心

たぐひなきみ姿。

おん身達よ

あのわたづみの男波、女波、千姿萬態なるも、その水性は毫もかはりはない。われら生きとし生けるもの、なべて外側から眺むれば、貧しきもの、富めるもの、貴きもの、賤しきもの、限りない姿。十人十色。

内側より眺むればみな同じはらから。

上御一人の赤子であり、一人子である。

おほみおやの聖子であり、一粒種である。

ゆめおろそかなものでない。

あの寄木細工の一つを脱けても全體は總崩れになるやうに、

あの鼎の一足が缺けても満足に立てぬやうに、

天地一切のもの皆、切るに切られぬ、あるものにつながれてゐる。

この切るに切られぬ同胞がどうして争はねばならぬだらうか。

なぜ睦みあふことのかなはぬや。

そこにも地主と小作人の軋轢。こゝにも資本家と労働者の争闘。そうしてつひには惨めな共倒れとなる。

なんといふ切なさ。

況して、親と呼び子と呼ぶ、夫となり妻となり、姉となり妹となり、主となり従となる、盡きせぬ因縁のあればこそ。

さはれ人の世の常なき流轉——そこに

生き往く白道の行者をみる。

この悲願にこそ

豆を煮るにそのまめがらを焚く。

豆、釜中にあつて泣く。

もとこれ同根より生ず。

相煎る、なんぞ、はなはだ急なる

と、これ曹植のものした名高い七歩の詩である。

この詩は、曹植常に兄曹丕のためにさいなまれ、その苦しき、切なさを嘆く。

豆なる弟は、まめがらなる兄につままれ愛護されてこそ生長する。それにひきかえこの弟を煮ころすやうなことのみを。されば豆なる弟は、いつも煮え湯の中に泣く。さはれ豆といひ、豆がらといふ。ものこそ異なれ同じ根から生れ

出た、切るに切られぬ兄弟である。それにこのしわざのつれなさ。

げに同根より生ずる骨肉の争ひ——人生は餘りにすさむ。荒みゆく。

唯、めぐまれて相抱く一つのみち

それは念々の懺悔であり、みむねによみがえる一つの悲願。

この悲願にこそ

ゆるす世界も、ゆるされる世界もこえて

ひたにひれふすみむねの温かき血に通ふ。

このあたゝかさ

この噉り泣きつゝ

とけあふてゆく心の匂ひ

ひれふし祈るこの悲願。

ただごとならじ

ひた走る列車中——老婆に乗換驛をたづねられたある日の思ひ出。

この地球上に生息してゐるものは一體どのくらゐあるのだらうか。それはとても私達の言葉でいふことは出来ない。唯無数といふ外はない。その無数の生類中の二十五億だけが、同じ人間としてこの世に生息してゐる。これがたゞ偶然といはれやうか。つきぬゆかりを觀ぜずにはゐられない。更にこの二十五億の人の中に、選ばれた九千萬の人間が、極東の大帝國に生れ、上に 聖天子を慈父と仰ぎ、心からなる同胞として互に抱きあふこと、それは決してたゞごとではない。その中の又三十人が同じ列車に乗りあはず、しかもその中の一人の老婆がわざわざ私の側にきて乗換驛をたづねられる。これがどうしてたゞごと

と考へられやう。過去世の深い／＼結びあはせである。かく考へくるときに、衷なる心に云ひしれぬものを深めずにはゐられぬ。この世でこそ今日始めて逢つた人のやうでも、すつとすつとそのゆかりをたぐる時、いつの世にかは、旅の道づれとなつたこともあらう。兄弟であつた事もあらう。親子であつたことさへもあつたかもしれぬ。

ほろ／＼となく山鳥の聲きけば

父かと思ふ母かと思ふ。

行基菩薩の心境もさすがに尊く拜ますにはゐられぬ。

ゆく雲。

てる月。

ひとひらの花片。

ちちとなく小鳥。

麥の芽。

土の香。

このひかりの輪を縫うて、物乞ひゆく老媪。

みんな、みんな、私達となんのかゝはりもないものとどうしていへやう。

あの山。

この川。

みんななづかしい限りのいのちにみなぎつてゐる。あふれてゐる。

思へば思ふほど

温い血が通つてゐる。涙めどもつきぬいのちがこん／＼とあみつちにわく。

おお 歡びに充つ。

躓きしもの、その前に立つもの

走るものは得て躓きやすい。躓くものは倒れる。倒れたるものは落伍する。

躓くものは倒れる。

ああ、躓きしもの、倒れしもの

御身達は、靜かに大地を踏んで立ちあがることを忘れて、頭で立ち上がらうと焦つたから。しかし焦れば焦るほど、肝心の足に力はいらぬ。七顛八倒。あとから後から來る人に踏みつけられ、踏み倒され、あはれ再び立ちあがるには、あまりに血に塗りつけられた。

かうした姿のなんと眼に映る日の多いこと。

痛ましい心に打たる。

おん身達は、

この社會の競争場裡に駆け出す前に、果して自分の力を吟味されしや。

腕の力を、足の力を、全體の力を、心の力を。

この吟味なしに飛び出したのではないか。

俺は最高學府を、俺は専門のこの才能をと自負したことはないかしら。

うぬぼれたことはないかしら。社會の實狀は、おん身達が學園の窓から、またあまりに小さい自らの心の窓から眺めてゐた視界にはあまりに荒み、あまりにこみ入つてゐる。おん身達の眩むばかりのめまぐるしい雑音と、喧騒とそこには、骨を削るやうな姿がありすぎる。

脱ぎすてよ、一切の虚榮の上衣。めざめよ、すべての自惚の迷夢から。

あはてず、あせらず、頭で歩むのではない。一步一步が大地を踏みしめてこそ。

な り き れ

儲かるため、贅澤せんがため、誇らんがため、それは働くことの眞實ではない。働くことそのことが生きる眞實の姿であり、そのまゝが自己を完成するの大作である。

働け、働け、働らいた上にも働らけ。

なりきれ、なりきれ、仕事そのものになりきる時、得失をのり越えて生きる、

眞實の姿を自覺するだらう。

私はこゝに自然畫家ミレーの畫いた、エンゼラスの鐘の音にゐるあの敬虔の念ひに充ちみちた、若夫婦の姿を憶ひ出さずにはゐられない。

一日の業を了へたる若き農夫とその妻と、

今方に家路につかんとするその時、エンゼラスの祈禱を告ぐる入相の鐘の音
野を、山を、丘を、越えてゆれるが如くひびく晩鐘。

大自然の彼方に沈む夕陽のまなか。

鎮まりゆく騒音の中からひびくあの晩鐘。

その神韻に、今しも敬虔な祈りを捧ぐる若き農夫ら

天に榮光あり

地に平和あり

人には至純の愛がわく

この無言の祈りこそ

大地を耕す一鍬、一鍬に大生命の微光を、いのちを、掘りかえす大地の行者。
なんとといふ莊嚴なる畫面だらう。

涌きいづるもの

滾々とつきぬ源泉に連ならざる河川は、たとへ水勢すさまじくとも久しから
ずして枯れるもの。それと同じやうに一時の空元氣や感激の瞬刻のスタートは、
足もとが危なくつてたまらない。そは、多くの時に、偶々なる難關にすら越え
切らぬ。ひいてはそのまま自棄てゆく。空元氣ではいけない。共感の瞬刻では
いけない。腹の底のその奥のどん底から湧きいづる力でなければ續かない。
私らは無限の力と結びたい。その時、ひよはな自らの魂にも無限の力が湧いて
くる。ファイフテも云つた。

有限の力が、無限絶對の力に結びつくとき、そこに驚くべき偉大なる力が現
はれる——と。

靈魂の秋

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

萩の露、虫の音、月の光、さすがに秋の風情は澄むものである。

秋は詩人の泣かるゝ時、哲人の考ふる時、道人の悟るべき時と誰かが云つた。感傷の春もすぎ、熾烈なる夏もすぎ、靈魂の秋に入りては思念は灯る。

思ひ出は餘りに深刻なページをひろげる。長男の天く逝かんとするに先たつ彼の母の急死——その長男の青春の死。今も胸せまる思ひに打たる。

景によりて情おこり、情によりて景をおもふ。脆きは人の心なるかな。うべなるかな。そこにかそけくもみむねのともされんことのみひたに祈らる。

この逆縁にして

私の過去は決して坦々たる大道ではなかつた。そこには越え難き荆棘の路のあまりに多き血まみれの足あとが残されて來た。

暗膽、蹉跎、悲惨、痛恨すべては私の過去を埋みするための文字である。しかしこの痛々しい過去がなかつたら、この悲惨な前半生がなかつたら、みむねに生きる日も來なかつた。これ全くこの逆縁の賜ものである。みめぐみである。

とまれ逆境のさ中にたつて、あふるゝ涙をふるひつゝ、敬虔な祈りに生き、輝きつゝ至心にみ名をよびまつる。見えねども、聞えねども、みつめつゝ、うなづきつゝ抱きあげたまう——そのみむねのあたゝかさ。

なんといふめぐまれたるものゝ、しあはせぞ。

病める若き婦人に返して

御身の涙もてものし給ひし玉づさ、同じ情ひに、同じ感じに、とめどもない涙のまゝに拜見いたしました。その後の御病状はいかゞにや、この頃の御心境はいかにおはすかなと思ひ出ぬ日とはなく一度お便りをと念じつゝもつひ、あはたゞしい旅の日のみに追はれけふの日になりました。

玉づさによれば、今は早や退院あそばされ、近き日におうちにお歸りとのこと、この難病、たとへ全快しても將來妻としての務めも及び難く、一切を捨て、と覺悟し、自ら進んでそのことを申し出ました。これが現在の私のとるべき最善の道と信じます。

とのお言葉、まこと雄々しい御決心、丈夫も及ばぬ御決心であります。さはれ

この御決心をなさるまでの御身の悩みはいかばかりなりしならむと、心からおいたはしう存じます。更に

かくする事こそ今のわが身に與えられたる運命と諦めつゝも、この病氣唯この一つの病氣故に、かくせねばならぬかと思ふとき、諦めつゝも、諦めつゝも、そのうちから無念の涙がにじみます。そうしてこの涙、自分ながら自分でどうすることも出来ません。

とのみ心。

そうです。そうです。ほんとうにそうです。次から次と心の奥から流れる、その御身の涙、ほんとうによくわかります。本當です。それが人間の至情です。さはれ、諦められぬと泣く涙は浅い涙です。諦めても、諦めても尙湧く涙こそ深い／＼心の奥の淵からわく涙です。私はこゝまでよまして頂いた時、御身の

胸中を拜察して泣きました。御身はかつて一茶の

露の身は 露の身ながら さりながら

あの悲痛な句をお讀みになつたことがあるでせう。この句は一茶の九つになる
愛兒敏女の死をいためる切ない句であります。

露の世は 露の世ながら

これは確かに一茶にも諦めが出来てゐます。露のやうなもろい世、朝日さすま
での露の命と聞いてはゐたこと、かゝるもろい世にあればこそ敏女の失せ去つ
たことも不思議ではない。げに露の世はまこと露の世であつたと、分別はつき
ました。けれど一茶もどうしても

さりながら

と心の奥のその切なさ、ほんとうの人間の魂を吐き出してゐます。

吐かずには生きられぬ切なさです。もし御身の言葉をかりるなら

自分ながら自分でどうすることも出来ません。

と云ふより外になんとも云ひやうのなさ。よし他から、いかに親切に慰められ
てもそれが眞の慰安にはなりません。そのやさしい言葉がかえつてわが心の痛
みにふれて涙をそゝるものであります。この切なさ、このなやみ、人間の力で
はどうすることも出来ません。お泣きなさい。お泣きなさい。御身の涙のつき
るまで。御身の聲のかれるまで、おほみおやのあの温いみ胸に御身の顔をおし
あて、よゝとおなきなさいませ。去月病床に御身をお訪ね申したとき、もは
やお話し申しましたやうに、唯々かはらぬ限りない愛はおほみおやのみであり
ます。されば御身が心の限りをつくし、ひたすら名をよび給ふ、まことのみに
胸にとほらぬことがありませう。おほみおやはどうしてじつとしてゐられませ

う。慈しみのみ手ははや御身のそのみ心を抱きしめてゐられる事にどうして氣附かずのたうか。唯ひたすらなるみ名呼び給ふその時、御身は、はやみ胸に顔をうづめてみおやの乳房にだきしめられてゐられるのではありませんか。そこには御身の久遠劫來のつくりなせるその罪業の鐵の鎖もときほどかれて、

いとし子よ、

とひしと抱きしめられた御身の、泣きぬれた夢のやうなみむねの温かさによみがへられる日のみを至心に祈りつづける私です。その時こそ、御身の惱みも夢からさめたやうな心の麗らかさになり給ふのであります。まことおこがましいことながら、ひたぶるにみ名はげみ給ふやうひとしほの祈りに迫られます。おほみおやより頂いた尊い御身、そのよみがえり給ひし大いなるみむねのまにまに、いよよ世のため人のため尊いお日暮し御静養ひたすらお祈り申します。

拜むころ

それは、二つのものが一つになり、相對するものを心から拜みまつる、和合と尊敬と——すなはち和敬そのまゝの心である。ゆかしさの限りの心。

尊敬をかいだ和合、それは秩序もない、禮儀もない、亂雑な世界である。

和合を忘れられた尊敬——それはとけあひのない、うるほひのない、四角四面のひからびた世界である。

心から拜み切るその尊さ。

拜まるゝものゝ高さより、拜むものゝ低き姿の尊さよ。

おがみあふ

何といふ、莊嚴なる世界かな。

裏なるもののその尊さ

自分自身を少しも反省しないで、他人のあらのみ探し出して得意になつてゐる人のさもしさ。

本當にそうです。仰せのとほりです。

一つの辯解もせず、絶えず自らの罪の深きにしみじみと、自らのあさましさに泣く人のうるはしさ。

思へば思ふほど、得意顔する人のおめでたさ、うつろさと、しみじみと泣いて跪く人の心の充實さを感じずにはゐられぬ。

かくいふ自らをじつとみつめて、これこそまさしく人を裁く心であると気づいた時の自分のさもしさ。

一莖の菜つ葉

昔、一人の求道者が比叡の山奥に住める、さる僧を訪ねんとして行く河沿ひの途すがら、ふと流れくる一莖の菜つ葉を見た。これはたしかに、今訪ねんとする高僧の住める僧院のあたりから流れきたもの、彼はつぶやいた。

もう訪ねることは止そう

一莖の菜つ葉を無駄に河に流すやうな僧なら高僧とは思はれない。と、このとき息切つてきた雑僧は頻りに河面に沿ふてなにかを探しつたがねきた。

この邊に菜つ葉は流れてきませんかしら。私はそれを追つてきたのです。と求道者は今更のやうにその高僧に心ゆくばかり道を求めた。

一莖の菜つ葉も大自然の大いなるみ力のいみじきみめぐみ——唯、頭が下がる。

生き伸びる

生きてゐるものなら、草でも、木でも、生き伸びる。伸びないものなら死んでゐるか、やがて死ぬものである。

人間も眞實に生きる者は伸びてゆく。現實よりより高く——より強く。生き伸びるものみに生成化育の發展がある。

價値低き生活より——より價値ある尊さへ。

小さな人間のひよはさから——大生命の無限さに、おほいなるいのちへと何百年のあの大木から、年々あの新鮮なる芽を吹くことよ。

あの芽——あの新鮮なる生命がみなぎつてこそ、より高く伸びてゆく。

祖國日本の悠遠の生命もあの老木の大木の芽の如く不斷に生成し彌榮である。

勝つもの敗けるもの

踏みにじられてもよい。打ちのめされてもよい。それが正義のためなら、それは決して恥かしい事ではない。何時の世も正義は最後の勝利者であるから、百年待て、千年待て、氣永く一万年を待つがよい。きつと立上る時が来る。

正義のために毒杯をのまれた哲人もある。公道のために、磔刑に處せられた聖者もある。彼等の聖靈は今幾億の生靈にかがやいてゐることか。

踏みにじるもの、打ちのめすもの、必らずしも永久の勝つものではない。彼の心中微塵でも私心あるとき、疚しいもののひそむとき、それは遠からず滅び行く運命にある。

たふされし竹はいつしか起きかへり、たふせし雪はあとかたもなし、

よみがえる一茶

焚くほどは 風がもてくる 落葉かな

木の葉かく すべをもしらで 年とりぬ

入るほどは 手がかいてくる 木の葉かな

一茶が五十の坂を二つ三つ越した以後の句である。

一茶は、幼少の頃から冷たい家庭に虐げられ、十四の時家を追はれ、浮世の荒波に投げられた。それから一生、あらゆる辛酸を嘗めつくし、苦しみに苦しみ抜いた人である。彼がひがみにひがんで自己の運命を呪ひ、世の一切を怨んだことも決して無理でない。かくもひがめる一茶、かくも世を怨める一茶も、大自然の愛に抱かれては頭を垂れずにはゐられなかつた。

この能のない自分、この不甲斐ない自分、世からも捨てられ、自らさへ愛憎のつきはてた自分、この自分さへなんといふ勿體ない大自然の大いなるめぐみによみがえらして頂いた日のめぐるとは

焚くほどは 風がもてくる 落葉かな

それにしても、天地の大いなるみめぐみにあまえ、五十の坂を越える今日まで木の葉かく道さへ知らずして過せしことよ。ああ勿體ない と

木の葉かく すべをもしらで 年とりぬ

木の葉かくすべすらもないこの自分のやうなものにまで、大自然のみめぐみはあたえらるる。このありがたさ、どうしてじつとしてゐられやう。

入るほどは 手がかいてくる 木の葉かな

ああ、働かねばあいすまぬと一茶もじつとしてゐられなかつたこと。

今現に生きてゐるといふこと

今、現に自分が生きてゐるといふことほど現實はあり得ない。

しかしこの現に今、生きてるといふそのことが、自分の力で生きてゐると誰が断じて云ひ得やうか。それとも自分よりより以上の偉大な、みちからに生かされてゐるのだらうか。

人はいふ。

自分は、自分の労働によつて生きてゐる。

と、しかし、その労働の出来る身體はどうしてできたのだらうか。

糸くづ一つでさへ、葉つ葉一枚ですら、人間の手ではつくられない。

あなたは太陽の光線を

空気を

自分で作つたおぼえがありますか。

それは宇宙の大生命によつて産み出され、創られたものではありませんまいか。

感謝せずにはゐられない。

合掌せずにはゐられない。

思へば思ふほど大自然のみめぐみに生きてゐる自分に氣づかせて貰ふ。

氣附かずにはゐられぬ。

さはれ、あまり偉大な、みめぐみは忘れがちの自分にあさましい。

途すがらの親切に、たまさかのなさけにすら、じつとしてゐられぬものを感じる自分が、かゝる、みめぐみに生きつつもなほ忘れがちに過す勿體なさ。

唯々ひれふしおろがむこの心。

眞の強い人

一度いひ出したら、是が非でも通そうとする人がある。自分のいひ分さへ通れば周囲のものがどんな迷惑をせうが、かまはぬと思つてゐる強情な人がある。強いばかりが決して誇りにはならない。強いものには獅子もおれば虎もおる。筋道のたたない腕つ節の強い強情我慢の人程、始末におへないものはない。こんな人は、形の上ではとても強そうに見えるが、その實、我執の惡魔に打勝つことの出来ない弱虫である。自分のいひ分には決して無理はない、理路整然たるものがあると思ひこんでゐるだけ始末に了へぬ。一度無我になり虚心坦懐になつて深く内觀反省して見ると、自分の議論も理路整然どころか、あちらにも、こちらにもあまたの際と矛盾のみが氣附かれる。

大凡、世の中に卑怯もの、未練ものといつても、自分の考へ方の間違つてゐる事に氣付きながら、これは自分の考へ違ひでありましたと、平身低頭、下座し懺悔することの出来ぬ人ほど卑怯未練のものはあるまい。

深夜靜かに孤燈影暗き下、既往を顧み深く内觀反省し、自分の過を見出したらすぐにも下座懺悔したい。所詮、人間の考へ方は正しいやうでもおれがおれがの我執をもととして捏ねあげたものでしかない。高い目から見るときは妙に歪んでゐるものである。

懺悔せう。懺悔すると、さつぱりした氣持になれる。

罪ありと知らば懺悔すべし

懺悔すれば則清淨なり

世尊の聖訓を今更のやうに尊く感ぜずにはゐられない。

過つてゐることを知りながら強辯これつとめ、辯疏これつとめ、無理を通さうとするところに、惱みと悶へが醸される。下座低頭、一度目は卑怯ものと嘲けらるる。それでも低頭合掌する。二度目は意氣地なしと嗤ふ。それにも關せずみ名となへつつ合掌する。心あるものはきつと胸打つ。よし胸せまるものなくとも、自分の根深い我執の悪魔に打勝つだけでも強くなる。

智慧あるものに瞋恚なし

瞋恚なくしてなど怒るべき

伏しがたきを伏す身は

寂靜の水 たひらかに

よしふく風は 荒くとも

心の中に 浪たたず

怒りて怒りに 報ひんは

げにこそ烏滯のわざなれや

(雜阿含經)

怒るたびに 必らず一つ鉢を割り

九百九十九 割りて 死なまし

どうして最後までは怒られぬのか。

どうして最後の一つはなぜ割られぬのだらう。

何かしら考へらるる。

放浪の旅にある一人がこんな歌をかきなぐつたこともあつた。

怒りても 怒りてもなほ 怒りえぬ

あはれ涙に ぬるるものあり。

良寛さま

草の庵 ねてもさめてもまうすこと

ただ なむあみだぶつなむあみだぶつ

たえず口吟みつつ、念佛三昧に日を送られた良寛さま。

比丘は、ただまこと（万事）はいらず、

常不輕菩薩の行ぞ殊勝なりける

とうたひつつ、一切生類を恭敬合掌したまへる常不輕菩薩の御徳に歸依合掌せる謙讓なあ良寛さま。

無邪氣な野山の子供相手に

山寺の和尚さんは

毬はけりたし毬はなし

猫を紙袋にほりこんで

ぼんとけりや

にやんとなく

ぼぼんの ぼんとけりや

にやにやの にやんとなく

山寺の

と、おもしろ、おかしく毬歌うたつて子供といつしよに戯むる良寛さま。

世をそむく 苔の衣はいとせまし

柴を焚きつゝ 世をあかしてん

と、口吟みつゝ清貧孤獨のうちに悠々と生涯を送つた良寛さま。

あの良寛さま、たまらなく、無性に好きな良寛さま。

越後出雲崎の良寛和尚誕生の家跡に建てられた、良寛堂にも一度行き度い。
國上山くぐみの五合庵には、十数年も錫を留められたと聞けば一度ぜひ登りたい。

天保二年正月六日、行年七十四才で逝つた彼の遺跡、越後三島郡島崎村にある
隆泉寺も訪ね、和尚の墓前に心のくまでしびたい。香華を献げてぬかづきた
い。否——否、あの思ひよる良寛さまに、ものいひたい。あはずにゐれぬこの
思慕は、この切念は、きつと應へてあえるとおもふ。

ああ、好きな良寛さま。

ああ、慕はしい良寛さま。

このたまらなく好きな、慕はしい、良寛さまのことについて、唯一つ書きたい
ことがある。書かずにゐられぬことがある。

それはこんな事である。

清くて温い、人間的であつてしかも染着のない、美しい、美しい、良寛さまと
貞心尼との純真な心と心との交りである。

貞心尼——それは結婚生活の破綻から、佛門に入つた、當時二十九才のうら若
い尼僧であつた。彼女は、高僧のほまれ高かつた七十の老齡の良寛さまを敬慕
して止まず、終に師と仰ぎ、それより五ヶ年間、良寛さまの臨終の夕まで師事
した彼女であつた。しかもこの五ヶ年間の二人の心の交りは、なんともいへな
い清らかな、なんとも云へない美しい、尊い微妙なるものであつた。

今、貞心尼の遺著「蓮の露」に收むるところの歌によつてこの二人のうるはし
い交りをあこがれん。

なんといふ清純な心だらう。

——はじめてあひ見たてまつりて 貞心

君にかく あひ見ることのうれしさも

まださめやらぬ夢かとぞおもふ

——おかえし

良寛

夢の世にかつまどろみて夢をまた

かたるも夢も それがまにまに

——いとねもごろなる道のものがたりに夜もふけぬれば 良寛

白たへの 衣でさむし秋の夜の

月なかぞらに すみわたるかも

——されどなほあかぬこちして 貞心

向ひゐて千代も八千代も見てしかな

空ゆく月のこと 問はずとも

——おかえし

良寛

心さへかはらざりせばはふづたの

たえず向はむ 千代も 八千代も

それよりしばらくたつて良寛さまより、貞心尼へおくりし消息の中に、やるせなき懐しさをよせて

君や忘る道やかくるるこのころは

待てどくらせど 音づれもなき

——その返しに

貞心

ことしげき むぐらのいほにとぢられて

身をば心に まかせざりけり

ある時、無礙の世界に安住し得ざるを嘆き、良寛さまに送つた貞心尼の歌に、
春風に み山の雪はとけぬれど

岩間によどむ 谷川の水

心の滯りをのけよとおごそかにおしへたる良寛さまのかへしに、

み山べの み雪とけなば谷川に

よどめる水は あらじとぞ思ふ

なんといふ清らかな、美しい二人の心と心とのとけあひであらうか。

もしこれをしも戀といふなら、まさしく人間的愛着をこえた、天界の戀とや
いはん。

良寛さま七十四才にして

むさし野の くさばの露のながらへて

ながらへはつる 身にしあらねば

最後の歌をのこして彼は久遠のみ國へ旅立つた。

貞心尼の嘆きはいかばかり、

その弔ひの歌に

生き死の 界はなれて住む身にも

さらぬ別れの あるぞ悲しき

ああ なんといふ良寛さまのなつかしさ。

ああ なんといふ貞心尼のきよらかさ。

ああ 慕はしい限りの良寛さま

草の庵 ねてもさめても申すこと

ただなむあみだぶつなむあみだぶつ

初めて道を求めんとする人々に

人は日頃いろいろのことにまぎらされてゐるが、その心の底をたづぬて見ると誰れでもが、不安と、焦燥と、不満の念がどこかに蠢めいてゐる。

何時死なねばならぬかの不安、

いつ親しい人に別れねばならぬかの不安、

いつどんな病魔におかされるかの不安、

やがてこの老の身の行先きの不安、

いつ天災地變におそはるるかの不安、

あまりにあはただしい人生への不安と焦燥、

じつとしてゐられぬといふ焦燥、

次々に迫る焦燥と不安の交響、

それはどうすることも出来ぬ不安であり、焦燥である。

これ等の不安からまぬかれたためには、人々は本氣になつて努力する。

しかし又その中にはこの不安を、酒に一時を胡麻化してゐる人もある。しかし

その醒めて後の不安と空虚はより深刻に刻まれてゆく。

自分の力量や、智能、腕によつて力づよく生きたいと願つてゐる。

これらは最も確なことである。

さはれ

何時不慮の災難がわいてこぬと誰がいえやう。

そこにはいろいろの備へもあらう。

しかし最後の一つ手前には、ただ、ものみな崩れる音が胸をうつ。

財寶にたよる。

これも亦、あればある程不安はつもの。

物や人や最後あてにはならぬとしても、親だけは、子だけはと一途になる。そこにも亦、心なき溝が掘られ、ひびがはいつてゐることがある。

又、死別の不安もくる。

かく考へくる時に、世のなべてのものは最後の一つ手前までしか、どうにもならぬことにおちゆく。

根本的の不安を、焦燥を、不満をのぞく最後のものには、あまりに情ない。與へられたものは、失望であり、孤獨である。

こうして、げにたよりにならぬものにたよらうとする。

そこにどうにかせずにはゐられないものが胸を衝く。

焦燥と不安——二等邊三角形の頂點が無限大につつたつてゆく。

どうすることも出来やうがない。

しかし、じつとしてはゐられない。

無眼人

それはわれらの肉眼でない。

心眼である——その心眼であるその開かぬ人である。

心のめしひ。

ここに、更に眼を拭はねばならぬ。

更に、心の眼を開かねばならぬ。

否、開かずには往かれぬ。

その眼——その心眼の開かれた時、

無限絶大の、莊嚴なる魂に射られる。

偉いなる大生命の尊容をおがむ。

ひれふさずにはゐられぬ、おほみおや、

求めて求めて求め得ざりし、自らのひよはな魂が

久遠劫來求めて來たまへる、おほみおやにあひまつる

長跪合掌——恭敬したてまつつてみ名を呼ぶ

なんといふ莊嚴さだらう。

無耳人

それはわれらの肉耳ではない。

心耳である——その心耳であるその聞えぬ人である。

こゝに更に耳をそばだてて聽け

更に心耳をさらえて聽かねばならぬ

否、聽かすには進まれぬ。

その耳——その耳の聞えくる時

大千も感動する、天來の聲を聽く。

汝一心正念にして直ちに來れ

われよく汝を護らん

水火の難に墮せんことをもおそれざれ

なんといふ絶對の喚び聲か。

ふるひたたずにはゐられぬ。

進まずにはゐられぬ。

久遠の喚びごえ。

この心眼——この心耳こそ

見はるかす大宇宙の

おほみおやに合掌し

大千に響きわたる

みなにふるひたつ

めさめたる魂の姿。

おお、なんといふ嚴肅なる 生命の輝かしさ

ひれふし

唱ふ

尊容のみ名に

大千はかがやきわたる。なりわたる。

かく聖なる感激も亦時を越えては逆流する。折りふしに磨くことを忘れてはならぬ。いろいろの欲望はおそひくる。

名譽を得たい。地位を得たい。權勢を、財寶を、

それがため貪りの心を生じ、得れば驕慢を起す。

得られぬ時に瞋り又、弱い者は愚痴に泣く。

一慾得れば又一慾——所詮みちたるの感謝を持たぬ。

それはつまり、完全なる自由、永遠の生命、常恒の平和を本然的に欣求しつつ

その反對のあらはれである。

そこに來て、又、感激の反芻、みむねに甦へるみ名を呼びつづけてゆく。

聖なる信仰に生きるものは、そこに不安も、焦燥も、不満もなく、平安と、満

足の歡びを持つ。

持つものは、持てるに感謝し

持たざれば、持たぬ安らかさにおり、

病めば病み、受難はそのま感謝より感激にふるひたち、

まことみむねに生きた、たしかなる不壊のものを獲たものは、

死に直面しても、偉大なるのぞみを永遠に持して往く。

かゝる人には、難も越え、病ひも消ゆる。

大宇宙をその身とし、み心としたまふ、おほみおやと一つにと希ふ。

これが念佛である。

念佛は、佛になりたい願求のやむにやまれぬ願行である。

あたかも赤ん坊が親と同じいものに育ちたひ本然の希ひから乳を求めるそのやうに、われらの念佛は心の奥にある——どうすることもできぬ

不安と焦燥の飢えから、永遠の生命、常恆の平和、無量のいのち、無量の光、そのおほみおやに育てられたい本然を願求する。

世に信仰は敗慘者のものといふ。

あはれなるかな、あてにならぬものをあてにするそのひよはな人々より、眼には見えぬどあの偉いなる大生命の躍動に交流する——これほど大いなる勇ましさはどこにあらう。

林檎の味を知らない人には、どんなに説明しても結局食べない限りわからない念佛の味は説明を越えた味。

念佛申してはじめて感得する靈感である。何か心に満たされゆくだけさ。

何かしら行きづまりからぬけゆく安けさ。

營養上の知識はなくも、人は食物により不思議にも力をうる。はたらきとなる

そこに不思議の力のあることがわかる。

信仰はいかにして得るや

聖典をひもとけ、聖教を聴け。

しかし、

讀む眼も聴く耳も心が開けねばどうにもならぬ。

先づ念佛にいそしみてこそ。

そこには、散じた心がおのづと静まり、丁度水面に天心の月の姿が明らかにうつるがやうに、みおやの尊容もおのづとわかる。

又つぎ次にあらはるるものすがたが、明らかになり、その考へも正しさにつく。

歸命に二つの意義を師父はおしへられた。

一は我を救ひたまへ

自分は無であり、空であり、無常であり、無我である。

わが力ではとても生きること、解脱することもできぬ。

唯、みおやの力を仰いで常住の安らぎを希ふ。

二は我を度したまへ

度は渡す。此岸より彼岸へ渡りたい。みおやのくにに生れたい。すくはれて

みむねあらはす力を希念し、人格向上の願求の大菩提心である。

佛にならましの願求がすなはち、み名である。

これまさしく

大悲のみおやに對する子としての

止むに止まれぬ志念である。

我をすてよ

殻を破れよ

きものを脱げよ

鐵鎖を棄てよ

無明を去れよ

自我をなげうてよ

愛と 生命と 歡喜と 平安とをもたらして

神の使は さきから戸外に立つてゐる。

汝は 汝の耳をすますことによつて、

彼^かのかすかなノツキングを聴きうるであらう。

汝は ただ戸を開けばよいのだ

戸を開くと同時に 無始の闇黒が破れて、光かがやく爽かな朝の空氣が潮の如く、汝の室に流れこむであらう。

と、印度の聖者ラビンドラナート・タゴールは云つた。

信仰とは、わが身と心のすべてを、みおやに献げることである。

わが一切を献げる時、おほみおやの靈應は、われらの心に宿ります。

ただ一切を みおやに献げ、み名を専念せよ。

しかるに人は我を棄つることを忘れて、小なる自我を飾ることに心をやつし、みおやとわれをへだてゆく。

ゆくりなくこの頃、たまたま 上宮太子の念佛法語を拜しよむ。
その文に

念佛は情にありて理にあらず

たとへば風人の月花に我を抛つて萬邪みな忘れ

聖理にかかはらずして情行を淨めて 君子の情を成ずるが如し

念佛の道も亦復かくの如く、専ら彼佛を念じて唯往生を願ひ、一心不亂に

稱名して、善すら尙とらず いはんや悪をや、迷妄を遠離し又法理を離れ

求めずして諸佛の情を成じ 修せずして菩薩の道を得るなり。

理者の知らざる所、悟者の達せざる所なり。

是の如き法の前には 智愚の論なく 上下の根なし。

と 捨て難い、斷ち難ひこの我執。

さはれこの我棄てぬ限り無明は連る。

久遠の光りはこの無明を照破せん。

お 百 姓

田植のまさなか

からついでいつものやうに水がない時がある。お百姓の骨折は又ひとしほである
 麥の刈入から引續いての田植。それでもたゆむ氣色もなく、朝から晩まで——
 老ひも、若きも、水田の中に一生懸命、立ち働く。

あのけなげな姿。

ああ、なんといふけだかさ。

この姿に對しては誰でも無條件に頭が下がる。

身を大自然にまかせ、心に野望なく、野心なく、よし、身は泥田の中に泳ぐと
 も、泥に染まらぬそのまごころ。

野邊の花をそのままに、清淨無垢のその姿、

われらはこの姿をとほして古聖の面影をあふぐ。

いつの間にやらおのづから掌が合はさる。

毀譽を超越し、利害を脱け、おもねりもなく、飾りもない、至純素朴の

あの言葉——あの動作

すべてをひきつけずにはおかない、力がせまる。

蘆花も云つた。

農は神の直参である。自然のふところに、自然の支配の下に、

自然をたすけて働く彼等、

人間化したる自然である。

と

ああ

あの自然の子——神の直参者

われらはお百姓を見るたびに、いつも次の歌がうかんでくる。

この秋は 雨かあられか 知らねども

その日 その日の 田草とるなり

いくたびくりかえしても、くりかえしても、くりかえし切らぬ味ひがわく。

人は仕事にかゝる前に、利害を打算する。儲かればやる。損すれば止める。

大變、利巧なやりかたである。

しかし、なんとなく水臭いものがある。

こんな氣持でやつた仕事に生命のこもつたものがあらうはずがない。

ものごとはなんでも、利害に目もくれず、成敗も越え、全生命を捧げてこそ、

本當のものが出来上る。

この秋は 雨か あらしか しらねども

何といふ大きさ

そこには利害を超越し、十露盤のけたをはづれて、大自然にまかせ切つた眞面目さがある。

この眞摯な氣持があればこそ、炎天の下に、その日その日の田草とる。信仰の道も、それである。

そこには、微塵も打算の氣持はゆるされぬ。唯 みむねのままにと全生命を捧げて、おほみおやのみ名をよびまつるのみ。

學者 いや

徳者 いや

今まのあたり母おはします

大正九年六月八日 この日 わがうつし身のたらちねは みおやの聖きみくに
にありました。

はや はたとせの 日はすぎた。

さはれ

今 まのあたり ちちのみの母はまします。

いまそのうつつ身の母はなけれど、そのみ霊のみまへに跪き、香を献げ、み名
唱へつつ、そとろ そのかみを念ずれば ことごとに、うつし身のおんははに
こたえまつるも、ただ悔恨の涙にくれぬものとはない。

われ二十四五歳までは とまれ薬餌にのみ親しみからくも生きた 蒲柳のたち、

わが母は わがいのちちぢめても この子 すこやかにならしめ給へと 神、
みほとけに 祈念やる方なかりしと
おもふだに むねつまる。

わが母は このわが身の健やかのため いかにか心を痛めきり 夜半のねざめも
いねられかねしや。

ひとたび 家を出て佛門に入つた身は、身命を献げて、ひたすら、み佛の道に
いそしめとは、あふたびごとの ねもごろなるかつての母のみをしへ。
さるにても この不孝の子われは、その懇なるをしへもきかず。

日ごとにすさみゆく、わが子のさまを見た時の、母のなげきはいかばかりなり
しや。

あら あさましのわが子よと いくそたび 泣かせまつたことだらう。

その たらちねは 今 まのあたり ここに まします。

今なほ 思ふだに胸くるしむは 母みまかる一月前、大正九年五月八日。

母からのみたよりに、

このたびは とても本復おぼつかなし。この息ある間に いま一度み法の話
きかせよ

との いとど切なる頼みであつた。

この心こめた、母のこの世の、あはれ最後のたよりにすら放浪の身にまかせず
臨終の母の頼みにもむくひえずして、旅の空に、夜をこめて、みおやの大悲こ
まごまと書き綴つたときの苦しさ。

このたより、くりひろげたる時の母のみ心。おもうだに身の毛いよだつ。

血をしぼり、骨を削る思ひして、からくも育てあげたわが子の、今はの説法も

聴きえて この世の別れと思つた時は、何事も、いかに諦めよかつた母も、さすがにあまりの口惜しさに、身もだえたまひし事とおもうだにただに泣かるばかり。

よるひるに みおやのめぐみ うけてより

あれぞ これぞと 目には 見えねど

今にしてかつての日のおん母の慈恩をおもひ、追慕の情に咽ぶもの、しかもそのうつそ身の母はおはさで 悔ひて泣く
あはれ

ああ 今 まのあたり 母 おはします。

おはさで止むべき 偉おほいなる おほみたま

みそなはしたまふ ぼほえませたまふにあらずや。

衷に燃ゆるもの

熱のなひ肉體、それは一つの死骸である

我ながら、わが情熱のあまりに冷却せるに、泣きたくなることがある。

自らの、衷なるものに信仰の靈火燃えずして、どうして人々の心魂を燃やすことができやう。

何も喋らんでもいい。

ただ 黙つて居れ。

無言で居ても、信仰の靈火さへ燃えておれば、次から次へと、あらゆる人々の心魂を燃やすにはおらない。

焼きつくさずにはおかない。

世の道を宣布する人達、御身の衷には信仰の靈火がひたもえに燃えつつあるか

百折不撓——勇往邁進

おう、ほんとうに、その意氣だ。

たぎる血潮の若人たちに希ふ。

あくまでも未成品であつてほしい。

ゆめ ゆめ既成品でなるなかれ。

未成品には 未來がある 伸びる生命が躍動する。生きてゐる。

ほとばしるものがある。じつとしてゐても、生き生きとしたいのちがある。

脈々たる血が流れてる。いいかげんには賣もしないが、又賣られもしない。

既成品には 未來がない。それまでのものでしかない。いつまでたつてもそれは凋んでゆくだけだ。そこまでのものでしかない。

品物でも、既成品はそれだけのねうちに賣れるか、ぶらさがつては塵のみつく

未成品には感激がある。

既成品には凋落がある。

大器はどこまでも晩成だ。百になつても青春の意氣は失ひたくない。

庭の小草が、雪の下からも大地にふいてあの芽にぐんぐんと萌えてゆく、あのやうに。

出来上つたと思ふたその時から、はや凋みかけてゐる。

逆轉第一歩が始まる。

世に既成品の多きこと——宗教家、教育家、否、學問でも、信仰でも。

これらは皆、屋、である。はや宗教屋、教育屋である。信仰屋である。

炭火すら燃えきつたものは、はや白い灰になるばかりである。

燃えはじめた炭火はその熱も火力も強い。

天地間一切の萬象は、おほみおやの大生命の表現でないものはない。

されば輝く一點の星に、綻ぶ一輪のあの花にも、青葉にとまる一匹の昆虫にも、みおやの大生命のあらはれでないものはない。

萬法一如、我と物とみおやの大生命を以つて相通するもの、みな、心からなるわが はらからである。

赤い舌をべろべろ出す小さな蛇に對してさへ、我が愛する友よと、いつくしみの手をさしのべた、古の聖者の芳躅が慕はしい。

ベヅニアへの途上、群り來る無数の小鳥に

わが姉妹なる小さき鳥たちよ

おん身たちは、神様の限りない御恩をうけてゐる。されば、おん身たちは、何處へ行つても、何處におつても、いつでも神様のみ徳を讃へねばならぬ。

神様は、おん身達を愛して下さるやうに、おん身達のまた子供を可愛がつて下さる。さればおん身達は、この限りなき御恩を忘れぬやうに、常に神様のみ徳を讃へねばならぬ。

と 説法した。アツシジの聖者、フランシスの高風が慕はしい。

それにしても、自分の側には、一羽の小鳥も、一匹の毛虫も側にこない。

あはれ、わが心 汚れ

われに隔つる心 あればである。

愛するものに跪け、

愛するものに死に跪け

愛は合掌をもたらす聖餐である。歸一であり歸命である。一つに燃ゆる光焔である。

昔から人生五十といふ。

われはその五十をとりの昔にとり越してもう六十二の年を重ねた。烏兔匆匆としてゆく水の如しといふが、いかにも人生のあはただしさに驚く。

人生は 風吹きすさぶ荒野である。

私はこの荒野の中に 永いながいさすらひの旅をつづけた、

とある詩人は歌つたが、われもこの旅人と同じやうに、六十餘年、放浪の旅をつづけたこと。

過ぎこし方を回顧すれば、淋しいこともあつた。苦しいこともあつた。腹立たしいこともあつた。涙のにじむこともあつた。否、そうした日のみの連続がわれのこしかたであつた。血で描いた自畫像。

思へば はろかにきつるものかな。

もしこの世に おほみおやましまさざりせば、恐らくわれはこの人生を呪つたであらう。呪はずにはゐられなかつたらう。

そこには、自分の力でどうすることも出来ないあまたの問題がある。

曰く 生活問題、曰く内的生活懊惱、曰く苦難に處する焦慮、曰く死の問題

ここにいひ知れぬ、不安と 焦燥と 矛盾と 空虚とを感ぜずにはゐられぬ。

かくて、淋しい時、苦しい時、瞑る時、涙はふる時、慈愛にみちみちた あ

おほみおやの尊容を思念し、み名呼びまつるとき

おお いとしの我が子、おん身の惱める心を痛みて、汝が泣く前より、汝の心のうちを思ひわづらひ、われは汝とともに泣きゐるよ

との無聲の聲を聴くのである。

この慈愛こもれる聲に勵まされ、鼓舞せられ、

おほみおや　かくもみ心碎き給ふ
ただ　このわがために

と、われを向上せしめんためのみおやの試練と感泣させられ、嵐吹く荒野が原にも、限りない希望の光を認めて、一步、一步とわが足を運ぶのである。

あせらずに、たゆまずに、一步、一步を踏みしめて、一時的の發憤ではいけない。一時的の感激ではいけない。永遠へのたゆまない足どりこそ。

一時は熾んに燃えあがつても、直きに消えゆく野火のやうな信仰では、駄目である。浅間の山、嵐よぶ日も、崩るる雨にも不斷に白煙を噴いてゐる。

山の表面が燃えてゐるのではない。

地球の奥底より燃えあがる炎である。

消さんとして何物も消すことは能はぬ。

われらの信仰——それは

浅間の山の噴煙のやうに

心の奥底から燃え出づるもので、なければならぬ。

誘惑の魔風が吹き荒ぶとも

迫害の豪雨が降りしきらうと

おめす

臆せず

ぐんぐんと進む

それでこそ究極の目的地に到達する。

信仰は娛樂でもなければ、ひまつぶしでもない。

この道は、恐らく寂しい孤獨の道であらう。

この道は、恐らく血のにじむやうな荆棘の道だらう。

そうしてこの道によらなければ、人間生活の眞實の意義を見出す事は出來ない。

天下みな酔えり、

我獨り醒めたり。

第一に信仰あるものの眼に映することは、周圍の無信仰の人達の、反省なき無意義の生活のそれである。

最初は、彼等を信仰に導かんと熱情より、勸説にこれにつとむるものである。しかも彼等はすなほにその勸めにうてあはぬ。

彼は焦りに焦る。はては腹立たしくさへ感じ、彼等の言動を批難せんとするの傾向にまで立到り、こゝに互ひに論争し、反目をうむ。

さはれ、それは決して利生の道ではない。

人を誘導せんとするものの態度はどこまでも謙讓でなければならぬ。虚心坦懐でなければならぬ。

御身はまづ、我身の入信以前を省みねばならぬ。彼等と同じやうに、反省なき

自覺なき、そのままの姿ではなかつたか。

一たびは説け。二たびは勸めよ。その上は唯 黙せよ。

この場合御身にゆるさるることは

唯、彼等の入信を

おほみおやに念願するばかりである。

生れかはつてこそ

年々歳々、年はあらたまる。

人々の心は、どれだけあらたまつてゆくだらうか。

三百六十五日四分一日。地球が一公轉すれば、ほつておいてもお正月は来る。それがどうしてめでたいのであらうか。

一陽來復。

そこに人心が急角度に生れかはつてこそお芽出たさの意義もある。

ものの世界にばかり首を突込んで、二つちも三つちもいかないで、行詰つてゐる人達は、おん身達のかつて氣附かなかつた、廣いひろい、心靈の世界がこの世の中にあることに氣附いてほしい。

取込むことだけが自己の幸福を得る唯一の道と心得てゐる人達は、献げることそれが、一層自分を幸福ならしむるものであることに心を向けてほしい。

自分のうしろに廣い座敷のあることを知らずに、外ばかり目指して、硝子戸につきあたつてゐるあの蠅のやうに、外の世界にばかり心を奪はれて、内の世界を忘れてゐる人達は、この際、廻心轉向、衝突のない、廣い内の世界のあることにめざめてほしい。

近代文明は、有産階級と無産階級と、この二つのものを天と地とのやうに遠隔の處に置いた。そうして有産階級の人達はあるにまかして、肉的享樂に耽溺し夢のやうな生活を送り、尊嚴な靈性を蝕ばませやうとしてをり、無産階級の人達は、かかる無意義の生活がたえられぬといつて、呪咀と、憎惡の心を以つて頻りに修羅の猛火を燃やしてゐる。

かくておのがじじ悶え悶えて安住の境地を見出し得ずにいるのである。

前者の心いきも間違つてゐるが、さりとて後者の心もちにも同感出来ぬ。

われらは物質の世界より離脱して、わが心を心靈の天地に棲ましめやう。肉の享樂、それは決して眞實のたのしみではない。あるものは焦燥と懊惱のみ。

信仰は、限りあるもの、無常の世界に見切りして、限らない絶對の天地に突入せんとするものである。

信仰は、有所得の念をふりすてて、無所得の心境に住し、天地宇宙を我が有となさんとするものである。

私達はそんな暢氣な事はいつてゐられぬ。食はねばならぬ。飲まねばならぬ。着ねばならぬ。この世智辛い世の中に、信仰とか、反省とか、感恩とか、奉仕とかいふやうな事を考へてゐては、とても生きてゆけぬ。

といふ人がある。

いや この山の草庵も浮世の外ではない。こゝにも浮世の嵐は吹いてくる山の中でも食はねばならぬ。この浮世の嵐の中に立てばこそ、より一層、信仰も、反省も、感恩も必要といふもの、浮世なればこそ、職に離るるのこともある。親を失ふこともある。妻子に別れることもある。友に双向はれることもある。かゝる場合に、不動の信念がなかつたら、不運の渦に巻き込まれて、再び起ちあがることの出来ないものである。

反省のない人——それは悔ひ改めることを知らない、更生のない、死の道を辿る人である。天地の恩寵を感謝し、みおやのみめぐみに感泣する人にして始めて心身を献げて、世のため、人のために、働くことの出来るもの。

生きるために働くぐらゐの事は、人間でなくても、下等動物でもやつてゐる

われらは、あの下等動物と同じ列に取扱はれては堪えられぬ。

現實の中に理想を實現し、暗黒の中に光明を見出し、死の中に生を得ること、まことに、眞實の宗教の目指す究極の目的である。

人間の活動し、努力しつゝあることは、唯、生きんがためではない。それは價值ある生活を得やうとするのである。價值ある生活とは、意義ある生活の謂である。價值のない、意義のない生活、それこそ盲目的の生活である。

吾人は須く現代を超越せざるべからずと叫んで、龍華寺墓畔に永遠の眠に入つた楞牛の、あの力強い聲が、無暗に慕はしい。

われらは何處までも、ものゝ世界を超越し、肉的人生を超越し、靈の天地に、靈的人生に飛躍せなければならぬ。

げに、靈的人生の新風光は、肉的人生に蠢めいてゐるものゝ窺ひ知り得ぬ別天地である。

寄せてはかへし、かへしてはおしよせる逆巻く人生の荒波も、日々吹き荒む煩惱の風雪も、絶えてわれ等の心境をかきみだすことなく、平安と、歡喜と感謝の中に、一大躍進をなし得るのである。

名利に束縛せらるゝものは、畢竟、名利の奴隸にして、名利を支配し得ざるもの、肉に束縛せらるゝものは、畢竟、肉の奴隸にして、肉を支配し得ざるもの。

われとは、須く、一切の迷執を打破し、一切を超越しなければならぬ。かさねて云ふ。

正月を迎へたのがおめでたいのではない。われらが更生の意氣に燃え、

無意義の生活より、有意義の生活に、
空虚の生活より、充實の生活に
呪咀の生活より、感謝の生活に
心を轉向せしむることである。

生れかはることである。

生れかはずることこそ、お芽出たいのである。

年輪の多数によつてのみその樹は尊くはない。幾百年の古木も中から腐つては死木である。芽が出ない。唯枯死してゆくばかり。

年輪よりも 生きてゐること。生き生きした樹はきつときつと芽をふいてゆくその芽がふいていつてこそあの鬱蒼たる大木になる。

あの新芽、なんと生き生きした生命そのものゝ象徴であらう。

業にさいなまれつゝ

けがれに充たされた我

ふがひない我

かよはい我

呪はしい現實生活

憧れの彼岸の世界

これが、てらひ、うぬぼれ、たかぶりの不純の念ひを離れて、深く内へ内へと内観反省するいつでも、心の奥底から湧き出る感じである。それにどうだらう。

今の今まで呪ふてゐた、その現實生活がしたはしくて、いかに理性の力を以て

しても、どうすることも出来ない。

これが、メーテルリングの内的運命といふのだらうか。
業の力といふのだらうか。

名前はなんでもいい

しかし肉の力の強いのに、本當に驚くものである。

つくづくとおもへばかなしいつまでも

身につかはる 心なるなん

泣いても 泣いても 泣きたらない自分の運命のつたなさ、

叱つても 叱つても 叱りきれぬ、自らの業の力づよさ、

どうしたらいいだらう。

しつこく纏ひくるこの煩惱の業になやまされては

この賊 つひに逃るゝ所なし

と叫んだのは菅公ではなかつたか。

現実生活と 理想生活との間に横つてゐる、越え難い海の深さに驚いて、

煩惱 深うして底なく

生死の海 ほとりなし

と 悲嘆の涙にかきくれたのは、長安の聖者善導大師ではなかつたか。

古往今來、幾百億の人に、血の涙をしばらくさせたのは、この力強い煩惱業の壓力であつた。

我も、人も、この壓力にさいなまれぬものは一人もない。

ゲーテの「若きエルテルの悲しみ」の中に、人間の力には一定の限度があるものであるといつてゐるが、人間は、ある程度までは、理性と努力とで、のし切

る事が出来る。

しかしその限度を越ゆると、理性でも努力でも、どうすることも出来ぬ。

或人があつた。

彼は酒癖があつた、彼の酒癖は家中を暗くして止まなかつた。とう／＼大それた失敗を演つた。

もう今度この大しくじりには、老の眼の母のなみだが見る目もいたましいほどであつた。彼は懺悔した。そうして誓つた。

しかし彼の懺悔も、彼の誓も、三ヶ月とたゝぬ間に、つひ繰返えされた失敗に拳して彼は泣いた。泣いて、泣いて自らに懺悔してみ名さへ呼んだ。

同じ事はその次も亦繰返された。

彼は、もう自分自身に愛想をつかしつゝ、しかも、どうする事も出来ぬ自分に

泣き伏した。

かゝる彼を見てどうしても責める事の出来ない自分。

おお——苦しからうと共に手を握り泣くのみである。

お前は、酒を呑んではならない事を、お前の理性はよく知つてゐる。

お前の意志は又十分に努力しつゝけた。それがどうすることも出来ぬ。止められない。それがお前の煩惱、業の力である。おゝ、ほんとうに苦しからう。

あゝ、業の力、自分自身で鍛へあげた、堅牢無比の業の鎖で、自分自身を縛りあげ、この鎖に引きずられて、跑きあがき悶へてゐる。それは決して他人の上ではない。われらの生活そのまゝの姿が、まさまさとあらはれてゐる事に氣附かずにはゐられぬ。

蛇のやうな業の力に執拗につけねらはれて、又しても罪を犯さずにはゐられぬ

自分、ほんとうに呪はれた、あさましい、不仕合せな自分である。
泣かすにはゐられない。悶へずにはゐられない。

自身はこれ罪惡生死の凡夫、贖劫よりこのかた、常に没し、常に流轉して、
出離の縁あることなし。

とは、誰の事でもない。この自分である。

この自らのあさましいこと、罪深い我であることにめさめざる以前は、自分
の事は棚にあげて、とかく人のことを批難してゐた。恐ろしい僭越の事であ
つた。

われには、とまれ、いかなる人をも裁く資格はない、たゞわれにゆるされた
一事は互ひの罪に同情、同感して相抱いて泣くことのみである。

このどうすることも出来ないわれ／＼は、唯、みむねにすぎるより道はない。

泣いて 泣いて 泣きぬれて 地に伏しまろび 天に號泣したそのあとに 更に
眼を拭ふて 見上げた時

泣きぬれた あさましい この瞳に

その涙なみだに

泣きぬれてこそ 泣き狂ふてこそ

おろがみまつる おほみおやの尊容

そのみむねのあたゝかさに 抱きしめられ 攝取さるゝ

感泣せずにはゐられない。

煩惱の業に引きずられ、生きんとして清く生き得ず、愛せんとして一人をも愛し
得ぬなら、一切を厭げて おほみおやのみむねに没入するより途がない。その時
總てはとける。あの大海の中に飛び込んだ人が水の重さを感じないそのやうに。

ものみ・なよし

ものには、ものそれ／＼の味がある、砂糖には砂糖の味、鹽には鹽のその味、唐辛には唐辛のその辛味。食物の調理の上からいへばどの味も必要である。

みなそれぞれの味がある。捨て難い價值がある。

それと同様に、成功には成功の味があり、失敗には失敗の味があり、健康には健康の、病氣には病氣の、おのがじゞ獨得の味がある。

しかるに世の多くの人々は、成功と健康との甘味のみ追つて、受難の苦味を見逃してゐる。

道を求むる心——それは受難の時にのみ胚胎する。

スピノザが

あるもの　みなよし

といつたやうに、この世のなべて一事一物、無意味のもの、無價值のものはない、どんなものでも、月の光りに照らされて美化されないものはないやうに。

今、信仰により、おほみおやの大生命に徹うして一切のものを眺めんか、あれにも、これにも、無上の價值があるのである。

世路風霜吾人鍊心の境

世性冷暖吾人忍性の地

世事顛倒吾人修行の資なり

と、歌つた、鐵舟翁の心境もさこそと窺はるる。

凡てに、ものみなに　自らの生命の糧をとる

そこには、なべての事々物々が、生命飛躍の鍵となる。

たゞこの現實の一步から

ただこの現實を眞實に生きよ。

徒らに過去を回憶して煩悶懊惱することを止めよ。

それはそうと百も承知して、そう出来ないのがどうすることも出来ぬ自分といふ人がある。如何にもそうである。

そこにわれらは全心全靈をみおやに献げて、み名を呼びまつり、われらの疵口を癒していたゞかねばならぬ。

日日これ好日

徒らに明日の事を思ひ煩ふことなかれと古聖も云つた。

現在の一刻一刻をほんとうに生きてゆくものにはすべての日が皆好日である。

今日を十分に生き切つてこそ、明日も明後日も、その次の日も永遠に、十分に生き切ることが出来る。

かくてこそ、彼の生涯は、光りかゞやき、潑刺たる生命が躍動する。

將來の計劃、それもよい。百年の大計といふのだから。

けれども遠い將來も、今日一日の連続であることを忘れてはならない。

將來の計劃を成し遂げる唯一のキイは、この現在のその瞬間から實行のスタートを切ることである。

實行のともなはない計畫、それは畢竟、實を結ばないあだ花である。現實にうつされない計畫、それは結局、痴人の夢である。たゞ脚下の瞬間をより正しくより強く、眞實に生きることである。生き抜くことである。たゞこの現實を、より眞剣に生き抜いて行く不退轉の行者こそ、往生人の姿である。

蓮月尼にひかれて

あすも来て 見むとおもへば家づとに
手折るもをしき 山さくら花

死ぬもよし 死なぬもよろしまた一つ
どうでもよしの 春はきにけり

うらやまし 心のまゝに 咲きてとく
すがくしくも ちるさくらかな

山里は まつの聲のみ さきなれて

風吹かぬ日は さびしかりけり

あつかりし ひるまのうさも 忘れ水

野中の月の かげのすゞしき

宿かさぬ 人のつらさを なさけにて

おぼろ月夜の 花のしたぶし

ちりほどの 心にかゝる雲もなし

けふかぎりの ゆふぐれの空

夕ぐれは ねにこむ鳥を またれけり
 こがらしさむき 山かげの庵

たまらなく好きな 蓮月尼、詠んでも詠んでも、詠みあかぬ、その香の高い、歌のかずかず、なんだか俗臭をあらはるゝ心地がする。
 彼女は幼名を誠と呼び、彼女には四人の子供もあつたやうだが、あらうことかそれが次から次からみなこの世を去つた。最後には借老を契つた夫までが四人の子供の後をおふて還らぬ旅へ旅立つた。
 若き女性として、こよない悲嘆にかきくれたことの思ふだにむねせまる。
 よるべなき自らの薄命をどんなにか、呟つたことだらう。

あはれ

あはれ

この激しい衝動は、彼女をして、人生のたのみ難きを悟らしめ、終に落飾出家し、あけてもくれても念佛三昧に心魂を献げる身となつた。

しかしこれこそあの氣高い蓮月尼をつくる、大きな大きな尊たふとい試練であつた。

彼女が日ぐらしの糧にもと、市に鬻いだ陶器に描いた自詠の歌の一つ／＼にも彼女の無我のそのけだかい心の香の限りなくうかゞはれる。

彼女は、明治八年二月八日、八十二歳の高齡で逝つた。

西京西加茂のほとりがその入寂の地といはるる。

ああ

たまらなく、なつかしい好きな蓮月尼である。

涙にぬるゝもの

無暗やたらに人を審判さはんものがある。うのめたかのためで人のあらを捜すことを心得てゐる人がある。わるい癖、やつかいな病氣である。

春風以て人に接し、秋霜以て自ら誠む

と、一齋先生は云はれたが、人生はなぜ自分に對して、もつと嚴肅に他人に對してもつと寛容になれないだらうか。

汝等の中 罪なきもの 先づ彼女を打て

とのクリストの聖訓を思ふ時、審判の鞭をふりあげる資格のあるものが、一體幾人あるだらうか。

われらは人を責むる前に、先づ自らを深く深く内觀反省せねばならぬ。

自らのあらをそつとしておいて、他人の身の上のみ、非難の鞭をあびせかけることの、なんと小賢がましいことだらう。

もつとも質のわるいものは、他人のあらを尾緒つけて公けのまへに、さも得意そうに吹聴することである。

こんな人は、他人をこきおろし、他人を傷け、この反面に自分の價値をあげやうとするのである。

佛教にはこれを自讃毀他とて嚴重に戒めるが、その陋劣さ、唾してもなほ足らぬ。而し寛容であれといふのは、人の缺點に對して無頓着であれといふのではない。注意すると相手が嫌な顔をするからまあ止しておこうといふのは、やはり自己心の現はれである。それはほめた事ではない。相手の道ならぬ事に對しては、十分の注意を促さねばならぬ。要は、責むる心が微塵もあつてはならぬ。

そこには憐憫の情がなければならぬ。更に一步を進めて、彼の道ならぬ道を、
 辿る心の根本を改造してやらうとの、無限同情の心が動かかねばならぬといふこ
 とである。なんとしても悪習から抜けられない、自分も苦しみ、人にも迷惑を
 かけると知りつつ止めやうとして止められない、こんな不仕合の人、この氣の
 毒な人に、どうして頭から叱りつけられやう。

どこまでも、涙をもつて語らねばならぬ。

こゝにも、良寛和尚の逸事を思ひ出さずにはゐられぬ。

山本由之——それは良寛和尚の弟で、良寛出家の後をうけて、山本家を相續し
 た人である。

ある日のこと——由之の妻であり、馬之助の母である安子から良寛のもとに

たよりがきた。

それには、是非一度きて俵馬之助に強意見がしてほしいといふことが、繰返し
 くりかえし認めてあつた。當時、山本家の家運が日一日と傾くにつれて、馬之
 助は若年の自棄からますます放蕩をつのらせ、傾きかけた家計をいよいよ窮乏
 させるばかりであつた。安子はその事で頻りに心を痛め、どうかしてわが家の
 悲運をもちかえそうと氣を揉んでゐたのであつた。

人を教へるとか、諭すといふことに自信を持ち得ない、又それを行ふとも思つ
 てゐない良寛も、さすがに安子のいぢらしい氣持を察しては、どうにか安子に
 安心がさせたかつた。

そんな心持から、翌朝早く五合庵を下つて、生家山本家を訪れた。

良寛の來訪を何よりもよろこんだのは安子であつた。

いそいそとして精一ばいにもてなした。

しかし母の心もちと、伯父の來訪とを、それとなく感づいてゐる馬之助は、露骨に反抗の色を示し

久し振りでございました

なにか御用事でもありましたか

と、ぶつきらぼうにたづねるのであつた。

良寛はさりげなく

いや、別に用事とでもないがの、久しく逢はぬので皆の顔が見たうなつてなと、ほゝえみつゝ答へた。

誰もかも、久遠の妄業にひかれつつ、あさましい道を、たどりつつあることを思ひ出しては、表にははむかひの色をあらはに示しながらも、うちには、あは

れみを乞ふやうな、さんざん叱つてほしいやうな、いたいたい姿の馬之助をまのあたり見ると、どうしても良寛には、冷い詰問や、強意見の鞭などふりあげる勇氣はなかつた。

しかし、どうかしてくれ、論してくれよと救ひを求めるやうな安子の態度を見ては、又、馬之助に意見せう、改心させなければと、安子にすまないやうな激しい自責さへ感ずるのであつた。

とつおいつするうちに空しく三日の日は過ぎた。

良寛は、最初の目的であつた、馬之助の問題にはつひに一言をも觸れ得ないで家の人に別れも告げず、そうと立ち歸らうとした。

まあ もうお歸りでございますか

と、あはて、奥から出て來た安子は、何かまだいひたげな心残りのやうすであ

つた。

はあ 思はず滞留いたしました。またゆつくりで参りませう。

あの一寸馬之助を呼んでくださらぬか。

と、良寛はいつた。

安子はきつと馬之助に申しきかせてくれるのだと喜んで馬之助を呼びに行つた。

良寛は、玄關に腰うちかけ、結びかけた草鞋の紐をそのままにして待つてゐた。

もう お歸りですか

と、馬之助は意外の面持で奥から出て來た。

良寛は、次の間の唐紙のきはに安子が潜んでゐる事も明らかに感じてゐた。

しかし、馬之助を眼の前に見ると、又しても決心が鈍つてしまつた。

またゆつくり出直してこよう。命さへあれば。

馬之助すまないが一寸草鞋の紐を結んでくれないかと 良寛はいつた。

かさねがさねの意外に、馬之助は變な氣もしたが、快く土間におりて、草鞋の紐を結びかけた。

數十年間、素足に草鞋がけで行脚の旅をつゞけてきた良寛の足は、農夫のそれにもまして、荒れにあれ、骨さへ露はに見えるやうであつた。

伯父上も、お年が寄られたなあ

と 身を屈めて紐を結んでゐた馬之助は、ふとさうした思ひにおそはれ、はかないやうな、寂しいやうな氣がしてならなかつた。

馬之助は、なにかしら胸の奥からたまらないものがわいてきた。

彼は結ぶ手の甲をみつめるともなく眼つむらすにはるられなかつた。

伯父上も、年寄られたなあ

彼は胸のうちに又こうよばずにはゐられなかつた。

なにかしらせまるものに、眼をそむけやうとする彼の手に熱いものがおちた。

思はず顔をあげて見た彼のまうへには、じつと涙をたゝへてみてる、伯父の顔があつた。

見あげた馬之助のうるんだ眼

それをじつとうるませてみてる良寛

なんといふ たまらない心のとけあひだらう

なんといふ たまらぬ 心のぬれあひ

馬之助は、あたりが急に暗がりのやうな心になつた。

何かしら大きな魂がこみあげてきて、熱い涙がとめどもなくあふれた。

そうした彼はものもいはず土間につつぶすやうに頭を垂れた。

良寛は、抱きあげるやうな心にぬれてじつと見てゐた事だらう。

なんといふ、尊い姿

良寛も馬之助もない

唯一つの、魂のほのほが、涙にぬれてともされた。

馬之助の放蕩は、その日からぶつゝりと止んだ。

許すことである。

責めてはならぬ。

ただじつと、涙にぬれて抱えたい

抱かすにはゐられぬ——その心のあたゝかさを、ものみなはとけてゆく。

變物といはれても

働こう。働こう。働らいて、働らいて、精根のつきるまで働こう。

しかしそれは金儲けのためでもなく、名を獲るのためでもなく、國のため世のためやるのだといふ自惚根性さへ脱けて、唯々最善をつくして働こう。

それは椽の下の力持ちだ。馬鹿のする事だと世間から嗤はれやう。當世向きのしない變物だと世間から嘲けられやう。それでいい。それでいい。

儲けるために、名を獲るために働く人は、とかく金や名に躓いて肝心の仕事に身のいらぬものである。國のため、世のためやるのだといふ自惚心、その自惚心に災されて、それに酬ひられぬと唯不平の爆發するもの。

生きてゐるといふことが、その未來一切のおかけである。

御飯を頂かずに、水を飲まずに、呼吸もせず、日光にもふれずに、生きてゐるものがあればそれは別。

既に御飯を頂き、水を飲み、呼吸をし、日光に浴して生きてゐるものなら、御恩報じに働らくことは、當然すぎるほど、當然のことである。

しかし、そんな椽の下の力持ちばかりしてゐては、生きてゆけないと云ふ人があるかもしれぬ。けれども、ものごとはなんでも——だらう——といふ想像ばかりではいけない。

生きられるか、生きられぬか、實際やつてみることだ。

それは生きられるに決つてゐる。

わが心から尊敬してゐる一人の道友がある。

彼は、世間的に確に變物といはれ、椽の下の力持ちばかりする馬鹿正直と云はるゝ型の人間である。彼は利益を度外視し、名に捕はれず、黙々としてみおやとともに身命を献げつくして働らいてゐる。

今では、初め彼を變物扱ひにしてゐた人も、馬鹿正直と嗤つてゐた人も、彼の崇高なる人格に、心から合掌してゐる。

そんなことは聞かなくともよく承知してゐることだが、それが、そんな氣持で働けない垢凡夫である。と

全くそうだ。

われもそんな氣持になれない垢凡夫の一人なのだ。かゝる垢凡夫なればこそ、いよゝ念佛道に精進し、小我の愛執に死んで、みおやの聖子と生れかはつて、いそいそと働き得る身とならねばならぬ。

見えざるもの

見えるもの——それは無常轉變のものである。

見えざるもの——わが識るを越えたところ——そこに、無限永遠のものがあるわれらは、見える無常轉變のもの、その奥に、無限永遠の力のあることを、忘れてはならぬ。

念佛三昧は、この無限永遠の生命に觸れんとするものである。

この無限永遠のものに觸れたる實證體驗が、不斷生活のうちに閃き出でてこそ日常茶飯事にもいひしれぬ深い意味と、つきせぬ生命が躍動するものである。ところが、その見えざる、この無限永遠のものが多くの場合、世人から等閑に附せられてゐる。そこに、總ての仕事が、うはすべりしてゐて、眞實の底力の

あるものが尠ない。

この無限永遠のものの上に、自分の腹が、どつさり据つてゐないと、あの風船玉のやうにふらつく。利害成敗によつては、有頂天になつたり、悲觀したりするものである。腹のどん底に、この力が充實してゐると、あの不倒翁のやうにいかなる失敗にも、どんな逆境にも、七轉び八起と、きつと起き上るものである。

念佛は老人の氣休めでもなければ、弱者のよばひごとでもない。

世に一大飛躍せうとするものゝ、活動の原動力を獲るのである。

念佛は、挽かれゆくものゝ挽歌ではない。

眞剣なる生活者の、唸り聲である。

進軍の喇叭である。

献ぐる愛

愛することは、奪ふことではない。

愛することは、献げることである。

戀人は、戀人のために一切を献げる。

母は、わが子のために、わが身と心の總てを献げる。

そこに、微塵だにわがためにせうとするものがあれば、至純の愛はめぐまれぬ。

夫は妻のために、妻は夫のために一切を献げ、親は子のため、子は親のため總てを捧げるその尊さ。

そこには、理窟もない。

量もない。

おほみおやは、われ等を救はんがために、一切をわれらに献げたまふ。

涅槃經に

苦を受くも苦を知らず、

衆の苦を受くるを見ること、己が苦の如し。

衆生のために地獄に處すと雖も、苦想及び悔心を生せず、

一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是れ如來一人の苦なり。

と、おほみおやは、われ等を救はんがために、自分の有てる全愛をわれらに與へんがために、いかに悩みたまふかをみよ。

これぞ、みおやの無限の愛であり、これぞ、みおやの無邊の大慈悲である。

献ぐる愛にのみ、悩む愛にのみ

神々しい愛の光がある。

かゝる愛によつてのみ、始めて群生を生かす力がある。

今の世、泰ふ愛にのみ没して、献ぐる愛に、めざめる人の稀有なるを慄む。

國を愛するとは、國のために一切を献ぐることである。

民に犠牲をのりこえた——たゞに献ぐる魂なくては國はあやふく、

民に犠牲をのりこえた——たゞに献ぐる魂あるとき、國はゆたかに彌榮ゆる。

その宗教的生活とは、畢竟この献ぐる愛に基礎づけられたる行動である。

わが頭の下る先生がある。

その先生は云ふ。

生徒を教養するといふことは、生徒を理窟型にはめることではない。

生徒を教養するといふことは、生徒の心に觸れることである。

觸れるには、小さい自分に死ななければならぬ。

一人を生かすには一人を殺さねばならぬ、と。

こゝにも

無我の愛。

犠牲的精神——それをのり越えたほゝえましい献身。

無縁の大慈悲。

なんとといふ尊厳さ。

なんとといふ偉いなる。

そこにこそ

ものみなを越えた

聖愛の無限と 尊さに

頭が下る。

裏を見せ表を見せて散るもみぢ

これは、良寛和尚が臨終に口吟んだ句であるといふ。

自分のやうな詩人でない者には、この句の深いものを味ふことはゆるされぬが
くちずさむことに、なんとなく心ひかれてたまらない。

どこかと突込んできかれても答へやうもないほど、なにかしら心ひかるる。

秋のしづかな、うららかな日、

風もないのに、二ひら三ひら音もなく、裏を見せ、表を見せて、庭面に舞ひ
落ちる美しい紅葉。

彼、まのあたりこの大自然の妙景を、良寛和尚は心ゆくまで見とれてゐる。

見とれてゐるいふよりは、この大自然そのものうちに融けこんでゐる。

見とれてゐる人間良寛は、この大自然の生命の微光に揺すられて
裏を見せ 表を見せて 散るもみぢ
と、いつてしまつた。

無我の心境から流れ出る一切のものが人間の心の線に觸れて、かくもいみじき
魂をひびき出すかと、頭が下る。

再びこの句をくちずさんでゐると、何かしら道德的のあるものをも暗示させら
れる心のわく。

裏を見せ 表を見せて 散るもみぢ

あのそよ風にも揺れおちるあの紅葉 表を見ても美しい、裏を見ても美しい。
表裏ない一片のもみぢ。

人間の生活風景もこのやうにと希ふ。

表すがたのいかに美しくとも、後姿のさみしいのは心にかゝる。

姿はせめてすぐれても、外に見えない心のすがたはどこかにその影をひく。

内なるもの、

見えざるもの、

自らのあまりに醜いあさましさ

そこには、うるはしさも、匂はしさもなく

唯、眼を掩ふもの、そむけるものみの自らをおもふ時、

このもみぢのうらおもてもの

そのうるはしさ いみじさを

良寛さまに、教へられたやうな心にふるふ。

こんなこと——良寛さまは聞く聲すらも逃げるだらうが。

おし拓け　そこには生命あり

沈滞——そこには最早、生命がない。

生きてゐるものならどこまでも生き伸びる。

伸びないものならすでに死んでゐるものである。

我らは、毎時毎瞬時に生活の外殻を打破つて、常に新らしく、絶えず鮮かに、無限に、永遠に、生命を創造してゆかぬばならぬ。

快樂や利得や名譽や、そんなものに何時までもこびりついて、死んだ生活の殻に立て籠つて一體どうせうとするのだ。

現實から未來へ、より強く、より高く、一步一步と新天地をおし拓いて進まねばならぬ。

われらの衷には、無限の創造力が内在しきつてゐる。

何故にこの力を無限に發揮せうとしないのか。

生命のない古い信條や、潑刺たる生氣のない小賢がましい教義のために、永い間、わが魂は踏みにじられた。

抽象的な概念や、死んだ論理や、畢竟——概念の遊戯

そんなものにわが生命を生かす眞實のものは微塵もない。

現状維持ではいけない。日に新に、日に新に、生成發展せねばならぬ。

そこに生命は躍動する。

そこに地涌の力がある。

萌え出でんとするもの

それは生命の胎動であり、躍動であり、生命の創造である。

創造せんとする願求

われらの心の奥底には、現實以上のあるものを創造しなければ止まない大きな力が潜んでゐる。

これこそ、われ、わが、宇宙の大生命に生きんとする、やむにやまれぬ切なる願求である。

われらが時々いひしれぬ寂しさを感じ、堪えざる惱ましさを感ずるのは、畢竟伸びんとする、わが衷なる靈性の伸び得ざる深い深い嘆きそのものあらはれである。

しかしこの寂しさ、惱ましきほど、世にも尊いものはない。

犬にも豚にも、この尊い寂しさ、この尊い惱ましきはない。

それは、彼等は理想もなく、抱負もなく、より高い希願もないからである。

厭離穢土欣求淨土

なんとといふ強い叫びだらう。

これほどわれらの胸に徹る聲はない。

これはわれらの心の奥の奥底から、湧きあがる眞實の聲である。——地涌の聲。

この眞實の聲に共鳴を感じぬものがあるなら、それは人生の世流れである。

とまれ靜かに人生を觀する誰しもがまづ劈頭に聞く強い響でなくてはならぬ。

現實の人生に對し、寂しさ、惱しさを痛感し、この穢土を厭離する人にして

初めて、理想の新天地を憶れ、眞實の世界を體現せんとする。

所謂、淨土を欣求する熱烈なる希念が燃える。

現世的な虚榮、あさはかな未來歡樂に耽つてゐる人々は、きつといふだらう。

厭離穢土欣求淨土——そんな無勢力な、そんな萎縮的なことをいつてどうする
青春は短い。今こそ、心ゆくまで地上の歡樂に浸れ、と

しかし彼等とても、この現實相に直面して、厭はしさ、呪はしさ、寂しさ、惱
ましさを感ぜぬわけではない。

彼らは、胃瘵患者がその苦痛に堪え切らず、モヒ注射によつて一時を胡麻化
すやうに、自らの胸中の苦惱を、酒色によつて胡麻化そうとしてゐる卑怯な
る、姿である。

何處かの詩人は云つた。

歡樂は短し、苦惱は永し。

しかし彼らにも晚かれ早かれ胡麻化し切れぬものがくる。心の奥の奥底から
こみあぐる魂の叫びを聞く時がきつとくる。

誰かがいつたやうに

歌舞管吹 自ら悲哀あり

歡樂のさ中にも、わがすゝりなく魂の聲を聞く時がきつと來る。

われらの心の奥底から、こみあぐるこの尊い聲を聴こう。

この聲こそ、われらをより崇高な世界へ導く尊い聲である。われらを願生の
世界へ進ませる尊い聲である。

この聲こそ、われらを聖國へ招喚したまふ おほみおやのみ聲である。

われらは かゝる願生のみち火たる

寂しさに

苦しさに

合掌せずにはゐられない。

伸びゆく信仰

生きた樹ならぐんぐん伸びる。

伸びない樹なら死んだ樹だ。

溜り水は臭つてしまふ。

さら／＼と流るゝ水には生命がある。

信仰も同じところに停つてゐては駄目である。

生きた信仰ならぐんぐん伸びる。

伸びよ、伸びよ、天まで伸びよ、またないさとりにゆくまで伸びろ

信仰を得たとて、それが日常生活に現はれないのでは、まだ／＼生きた信仰とは云へない。

植物も種子が芽生え、根をおろし、幹となり、枝としげり、花を咲かせ、實を結ぶやうに、信仰の伸びゆく姿にも信仰そのものの力によつてあらはれてゆく。

躓いても

倒れても

血まみれに敗れても

その躓きに、その倒されたのに、一敗血に塗れても、立ち上る

その立ち上る血みどろな姿こそ、人間的にはあまりに悲壯であるものの信仰に生き甦るそのものは

血みどろの勇者、血みどろの歡喜に打ちふるひつつ勇猛精進して止まぬ。

假へもろもろの苦毒の中にわが身を止むとも

我が行を精進して忍んで終に悔ひず

不退轉の行者たれ

久遠の希望。

一山越えたら次の山、

千波越ゆれば又萬波、

進め、進め、わが精根のつきるまで。

高い高い、より高い、めあてに向つて進まねばならぬ。

小成に安んずること、それは人生の墮落である。

一つの希望が遂げられたら、又次の希望に起つべきである。

限りない希望——より高く、より崇く。

希望のない生活——それは生ける屍である。

たとへ肉體的に生きてゐても、その魂はまさに死の淵に沈んでゐる。

久遠の希望に起つてゐる人は、どんな場合にも、失望と落膽の暗い影には消されない。そこには、潜む力に萌えいでんとする歡びを持してゐる。

人生のゆくで——それはゆめ安らかではない。前途には踏み分け難い荆棘のみしげつてゐる。嶮岨な、嶮しい道ばかりが横はつてゐる。

これを切り抜けること

これをおし拓くこと

それはそれは至難の事に相違ない。苦しきもその喘ぎも見えるやうに判る。

しかし しかし

苦しきともやれ。齒をかみしめても、血をたらしめても、

やつてやつて、やり抜かねばならぬ。

外から見れば六尺にたらぬ小さな體である。

百年の壽命をなし難い短い生命である。けれども、わが内なるものはその小さなものでもなければ、そんな短かいものでもない。

確かにわが内なるものは、宇宙の大生命につらなり、宇宙の大靈に通ふてゐるこの力を養ひ、この力を發揮せば、逆境ゆめおそるるに足らぬ。窮乏おそるるに足らぬ。迫害おそるるに足らぬ。

唯慍むのは、人はかゝる偉いなるものを内に藏しつつ、これを養ふことを忘れこの力を發揮することに努めずしておはるものさへある。

逆境にひるみ、窮乏に泣き、迫害におののく。
唯有一乘法、無二亦無三

わが内なるものを養ふの道、唯一つ。

わが靈性を發揮するの法、二もなければ亦三もない。

念佛三昧こそ唯一無二の最も勝れた道である。

無上道である。

念佛——それはまことに簡單である。これを唱ふるわが唇は汚れてゐる。

しかしこの聖名こそ、なべての衆生の無明を煩惱を碎破して、われらの靈性を開發せんとの大願からあらはれた血涙の結晶である。

量り知れないこのいのちこそ——このみ名こそ

おほみおやとわが心と無限に結ぶ魂の電線である。

されば、至心に信樂して、おほみおやのみ名呼びまつるその時、汚れたるものは清められ、過まれるものは改められ、倒れたものは起ち上る

いくそたびくりかえしたことが、
 宗教の生命は、所詮 みおやのみ心をわが心に宿し、わが心をみおやのみ心に宿すことである。
 こゝに、小さい舊い我に死んで、新らしい偉大なる我によみがえり生氣いよよ
 潑刺として、久遠の生命の胎動がある。躍進がある。
 生の生
 光の光
 力の力
 たるものである。
 何物があつて抗する
 まさしく大地も感動止まぬこの偉いなる力。

なんとといふ莊嚴さ。
 なんとといふ嚴肅なる。
 まさしく今、まのあたり
 われらの衷なる大生命の躍動が
 天地になりひびき、
 ゆり動かす。
 この力
 この力こそ
 不退轉の
 行者の力。

心魂を打ちこめ

ミケロ・アンゼロがある時熱心に畫筆を揮つてゐた
つひに疲れ切つた彼はそのままそこに眠りおちた。

その時ふしぎにも彼の眠の間に天の使來つて彼の畫筆を動かして天晴れの畫が
完成した。その作品は彼の一生を通じての傑作といふ。

單なる傑作といふにあまり神々しいかがやきがある。

と誰かのものせしものを見た。

この物語りはわれらに深い深いあるものを感動させる。

何事をやるにも自分の心魂をぶち込んで、根かぎりやつてやり抜くことである。
熱もない、さて冷たくもない態度は何事も叶はぬ。

佛教に三昧といふことがある。

三昧とは一つになり切ることである。

一心にして正念である。

そこに眞の徹るものがわいてくる。

念佛するには念佛になり切る。

心身を献げ切つてそこに覺れるまでやることである。

かく精進に精進をかさぬる時、言ふにいはれぬ不可思議の聖境に直面する。

丁度、ミケロ・アンゼロの畫筆に精根つきはててつひにたほれ、深い眠に落ち

た時、われならぬ天の靈筆が畫面に躍つたその魂の動きである。

眞剣に、覺れるまで、心魂を打ちこんでかからねばならぬ。

そこには、ものみなが感動する。創られる。

編輯のあとの言葉

どうした宿縁のもよほしか全く夢のやうである。ほんとうに考へれば考へる程不思議でならぬ思ひ出のみが、もつれもつれて、とうとうこの度の『崩え出づるもの』から『あふひ叢書』の編輯に。こうもみむねに生かして頂く日の巡り來るとは、ただごとではないあるものに胸衝かるる。ただひそかにも、かそけくも、たえだえにも、み名に生き得たことの尊さ、勿體なさ。ゆくりなく、N姉によつてみめぐみにあひ、みむねにふれ、今こゝにこの編輯のことに携はらして頂く、おはからひと云はずにおれぬ。このままがおはからひである。願れば去年の夏、世を呪ひ人を怨んで天を仰ぎ地に伏してなほ苦悶に閉されてゆく自らのいかに惨めなものであつたか。めしひであつたこのわれにみむねはつひにN姉をとほしてすくはせ給ふ。そこにわが師父熊野上人を仰ぐに至り、

ただ身も世もない聖なる感激にうたれずにはゐられなかつた。指折りみれば三百日餘のこの日暮しに、絶えずうるはしく、たえずみちびき下さつたのは師父熊野上人であつた。またその好月夫人であつた。

たまたまこの上人の著作集の編輯についてお話を承く。せめてせめてのこの所願のかなはるるやとさし迫る感激をおさへて幾日——そのうちにも亦、連なる試練の日は波打つた。

この心にして、この貧しさにしてと思ふ心もふりすてて編輯のことに携はる。もとより、心にあふるるの信もなく、またひよはながらのその能きもなくしてこの尊い、師父上人をとほしてのなべての魂に呼びかけらるる大事を任せ頂いてからのわれながらのひたむきな心にも堪えられぬこともしばしばあつた。

それは思ひあまつて夜半の山内をさまよひ、たたずみては、自らの念佛のあさまじさに

泣かれゆき、幾度か、感激のあとのあまりのさもしさにためらつた。しかし、ただこまでもこのわれにこそとの上人の恩情にぬらさるるままに、N姉の心からなる念願と、その愛妹の限りない心やりにおしすめられ、この編輯をさせて頂く。今はただ 師父上人のみ心の萬分の一をも生かさして頂き得ぬのみか、ただに潰しまつたこの編輯の心苦しくて堪えられぬもののみが眼にちらつき、心に咽ぶ。希くば 同信諸姉の限りないみ心ばえに、より崇く、より尊く、かがやきわたるみむねに、磨ぎ出し賜はらんことのみが、せめてもの今はの祈念。また次々の編輯に、ひよはる自らに鞭打ちつつすまんとすることのわれに、み心の限りの鞭のはげましと、みなさけを垂れたまはんことを跪き祈るのみ。(眞木生)

あふひ叢書刊行について

眼まぐるしい社会状勢の進展である。そこには、中心の流れは、盡きぬ不動の大生命に流れつゝ、あまりに刻々に伸展する、せずにはゐれぬ内なるものゝ感動にせまられる。この時、われらの師父熊野上人の燃ゆる信仰の熱と力とその人格の衷なるものゝ學識の著作を通じてみむねに生き伸びん至念から 希ふてこの『あふひ叢書』の刊行となつた。その内規は

内容——感想、隨筆、論叢、聖典講義、その他、遍く光明運動の爲の普及版

体裁——四六判、百五十頁内外、定價各冊共金三十錢(郵税六錢)

御願——次々への編輯の糧として、讀後感想をたつて御願ひ申します。

尙、次々の刊行への御豫約を賜はらんことを。

昭和十四年四月二十二日印刷 定價一部三十錢
昭和十四年四月二十九日發行 郵稅六錢

著者兼發行人 山口市上宇野令第八番地 熊野宗純

印刷人 山口市下宇野令一六四八 伊賀崎重男

印刷所 山口市下宇野令一六四八 山口刑務所

發行所 山口市古熊善生寺山内 葵草舍
振替下關一九二五番

山口市古熊善生寺山内

389
180

終

